

## 特集 ことばを使う力を育てる

# 自己表現としてのスピーキング活動 活動の工夫とステップづくり

田中 武夫 (山梨大学)



### スピーキング活動に自己表現を取り入れる

授業でスピーキング活動を行ってみても、生徒が恥ずかしがって話さない、話すことがなかったり英語表現がわからなかったりして話そうとしない、といった経験のある先生方は多いかと思えます。では、どのようにすれば、生徒を積極的にスピーキング活動に取り組ませることができるのでしょうか。その解決策の1つとして、スピーキング活動の中に自己表現を取り入れてみるのが考えられます。

自己表現とは、自分のことや自分の考えや思いを他者に伝えることを指します(田中・田中, 2003)。生徒自身に関する情報を表現させれば、「自分のことを相手に伝えたい・相手のことを聞いてみたい」と生徒に思わせ、情報のやりとりに価値を感じさせることができます。また、自分に関することなので、表現内容は生徒の中にすでにあり、時間をかけずに活動を始めることができます。

では、自己表現をスピーキング活動に取り入れる際には、何に注意すればよいのでしょうか。ここでは、「スピーキング活動の工夫」「言語活動内のステップの工夫」の2つについて見てみましょう。

### スピーキング活動の工夫

英語授業の中で行われるスピーキング活動は、特定の文法を使わせる焦点化された(focused)活動と、特定の文法を必ずしも使わなくてもよい焦点化されていない(unfocused)活動に分けられます。ここでは、前者の活動を例に考えてみます。

焦点化されたスピーキング活動の主な目的は、学習した文法を使って相手にメッセージを伝えることができるようにすることです。つまり、その文法に

コミュニケーションを支える働きがあることを、自分のことを表現させる中で生徒に実感させることです。

そのためには、まず、私たちはスピーキング活動そのものを工夫することが大切です。自然な文脈の中で、生徒が積極的に自分のことを表現してみようと思える魅力的な活動にするためには、活動にいくつかの条件が必要となります(表1を参照)。

第1に、活動内容が生徒にとって興味のもてるものかどうかです。サッカーボールとテニスボールの大きさを比較させるより、微妙な年の差のある実際の先生の年齢を予想させる方が興味を引き出します。

第2に、活動での言語使用にメッセージを伝える明確な目的があるかどうかです。1年間の思い出を単に話すより、帰国するALTの先生にお礼を伝える目的で思い出を話す方が、生徒の目的意識は高まり、活動に対して積極的になることができます。

表1. よい言語活動の条件

活動の条件	よくある例	よい例
① 生徒が興味をもてるか?	サッカーボールとテニスボールの大きさを比較しよう	年の差が微妙な、学校内の先生の年齢を予想し発表しよう
② メッセージを伝える目的があるか?	過去形を使って1年間の思い出を話そう	9月に帰国するALTのジョン先生にお礼を伝えよう
③ 結果が求められているか?	友達とサッカー、テニス、野球のどれが好きかインタビューしよう	サッカー、テニス、野球のグループ内の人気度を順に並べよう
④ 実社会と関係しているか?	「私は英語を勉強する予定です」を英語にしよう	be going to を使って、夏休みの予定について話し合おう

(Willis & Willis, 2007 をもとに筆者改変)

第3に、活動を行った結果が求められているかどうかです。単に人気スポーツをインタビューさせるだけでなく、インタビューした結果をもとにグループごとに人気順を報告させれば、生徒は達成感を感じるでしょう。

第4に、活動が実社会と関係しているかどうかです。“be going to”を使って自分の夏休みの予定を伝える方が、日本語を英語に訳すよりも、実社会で役立つ価値ある活動と感じるでしょう。

このように、生徒を、学習した文法を使ったスピーキング活動に取り組ませる際、どのような目的や場面のもとで表現させれば、生徒にとって魅力的な活動になるかを考え、工夫することが大切です。

### 言語活動内のステップの工夫

スピーキング活動を授業でうまく活用するには、どの生徒も無理なく活動に参加でき達成感をもてるよう、活動の前後に適切なステップを組む必要があります。例えば、(1)これから行う活動のモデルを提示し、使われる表現を確認する。(いきなり活動に入らず、生徒に活動の目的や内容を具体的にイメージさせます。)(2)モデルで使われた表現をしっかり練習する。(練習は、生徒が自信をもって活動に取り組ませるために重要です。)(3)モデルの内容を参考に、自分のことを英語で表現させる。(4)活動後、発表したことをノートに書かせる。(口頭でやりとりしたことを書く作業を入れることで、より確実に定着を促します。)(5)教師や友達からのフィードバックを返す。(表現したことに對しフィードバックがあれば、客観的に表現や内容を振り返り確認することができます。)

### スピーキング活動の具体例


では、自己表現を取り入れたスピーキング活動の具体例を見てみましょう。スピーキング活動には、形式的にみて、次のようなタイプがあります。(1)会話のような対話型(dialog)か、スピーチのような一方向型(monolog)、(2)活動前に原稿を準備するような計画型(planned)か、即興に近い非計画型(unplanned)です。

24NCには、これらの異なるタイプのスピーキン



### BOOK 1, LESSON 7, USE Speak

#### 何ができますか？

●友達に、できること・できないことをたずねて、無人島と一緒に行く仲間を探そう。



1 由希とジョンの会話を聞いて、聞き取った内容をメモしよう。

	できること	できないこと
 由希		
 ジョン		

○由希はジョンに何とたずね、ジョンはどう答えていたか、確認しよう。 (make a fire 火をおこす, knife ナイフ)

2 あなたは無人島に行くことになりました。ボートは4人乗りなので、あと3人まで一緒に行くことができます。一緒に行く仲間を探そう。

(1) どのようなことができる人と一緒に行きたいですか。3つまで✓を入れよう。

cook well     climb trees     swim fast  
 make a fire     use a knife     play the guitar

(2) (1)で✓を入れたことを表に書き、できるかどうか友達に聞いてみよう。できると答えたら、その友達の名前を表に書き入れよう。

Can you ~?	できると答えた友達の名前

グ活動が準備されていますが、ここでは、対話型で非計画型のスピーキング活動である BOOK 1, LESSON 7にある USE Speak を例として取り上げます。この活動は、助動詞 can を使って友達にできること・できないことを尋ね合うものです。上述した言語活動とステップの工夫が、うまくデザインされています。

例えば、単に自分のできる(ない)ことを言わせるのではなく、無人島と一緒に行く仲間を探すために、自分ができる(ない)ことを伝え合うという明確かつ興味のもてる目的があります。実社会でもありえる、ある目的のために一緒に行く仲間を探し出すという、結果を求める活動です。したがって、学習した助動詞 can を必然的に使うことになり、意味のある文脈の中でその文法の働きを実感させる活動となります。また、すぐにスピーキング活動に入るのではなく、活動のモデルとなるリスニング活動から始まり、スピーキング活動を終えた後には、表現したことを書く活動も準備されています。

このように、生徒にとって魅力的で価値あるスピーキング活動を工夫し、自信をもって取り組めるステップをうまくデザインしていきたいものです。

#### 【参考文献】

田中 武夫・田中 知聡 (2003), 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』大修館書店。  
 Willis, D. & Willis J. (2007), *Doing Task-based Teaching*. Oxford University Press.